

跡見学園女子大学を去るに当たり

泉 雅博

1992年4月、齢40を数える、とても若いとはいえない新人として新座キャンパスの土を踏みしめた、あの日の高揚感が今も思い起こされます。初めて東京の地に一步を踏み入れた日の高揚感と、似ていたかも知れません。奥能登の海辺の小さな町から、18の歳に上京してきました。詰め襟の学生服を着て、ポストンバック一つを持ち、夜行列車に乗り、早朝の上野駅に着いたあの日、絵に描いたような田舎者の上京風景でした。以来、52年の歳月が過ぎ去りましたが、うち30年間を本学でお世話になりました。

跡見学園女子大学に職場を得る切っ掛けとなったのは、恩師の網野善彦先生がたまたま本学で講演をされたことからです。当時の私は、網野先生が研究所員として兼務されていた神奈川大学の日本常民文化研究所を拠点にして、各地の自治体史の編纂事業などに参加しながら研究生活を送っていました。

大学の卒業時、郷里の高校に教員として採用が決まっていました。それにもかかわらず、研究の世界に足を踏み入れることにした最も大きな要因は、いま一人の恩師、長倉保先生から学部時代に「地方文書」が持つ魅力を教えていただいたことによります。「地方文書」には、現在、この日本から消えてしまったかつての村と、そこに生きた人びとの歴史が刻まれています。大いに悩み迷いましたが、しかし研究への想いが勝ってしまいました。以来、日本の各地に足を運び、地域に生きた人びとの眼差しから日本の歴史を捉え返す、そのような研究を信条としてきました。

それにしても、跡見学園とは全く縁のない、しかも研究面でも教育面でも未熟としか言いようのなかった私を採用してくださった本学には、感謝の言葉もありません。

講義中、私語への対抗策として黒板の隅に、小さく「ウルチャイ」と書いた教室。夏の厳しい暑さのなか、学生たちと古文書調査で流した汗。大阪の木津や中之島、京都の不言亭跡などで花蹊さんを偲んだ日。「花桜」が自然に口をつき驚いている自分…。本学での30年間、さまざまなことが脳裡を駆けめぐります。しかし、退職の日を迎えた今ともなりますと、すべてが懐かしさの感情のなかに溶け込んでしまいそうです。

いつしか、心の裡に「跡見愛」のようなものが育まれた30年間でした。そして、良き学生たち、良き職員の皆様、良き先生方に恵まれた30年間でした。私にとって、跡見学園女子大学は「生涯の恩人」です。長い間、本当にありがとうございました。

